

災害看護伝える使命

災害看護 1995年の阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件などを機に国内で体系化が進み、2009年から看護基礎教育に盛り込まれた。日本災害看護学会は「災害に関する看護独自の知識や技術を体系的にかつ柔軟に用いるとともに、他の専門分野と協力して、災害の及ぼす生命や健康生活への被害を極力少なくするための活動を展開すること」と定義している。

岐阜保健大大学院・畑教授

1995年1月の阪神淡路大震災の当時、神戸市長田区の専修学校の教員だった畑吉節未さん(66)は17日、岐阜市のアパートの一室で発生時刻に黙とうをさげた。建物の倒壊と火災で焼け跡になり、区内だけで900人以上が亡くなった街の惨状を目の当たりにしており、震災を機に、災害看護の研究に取り組みむうに。電気や水が途絶え、高度な医療ができない状況で殺到する患者に対処する追われる極限での看護を次の世代に伝えている。

(堀尚人)

災に備えて 岐阜の現場から

あの日、「ドン」と突き上げる衝撃で飛び起きた。20個のおにぎりやリンゴを載せた車で、夫と兵庫県加古川市の自宅を出た。渋滞を避けて山側の道路を走ると、高台から真っ赤になった長田の街が見えた。空高く立ち上る煙。勤務先の県立総合衛生学院は、現実とは思えないその光景の一角にあった。18歳から看護を学び、27歳で教員として再び戻った学校はJR鷹取駅の南東。

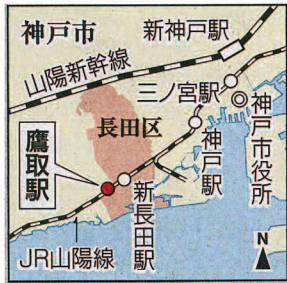
たどり着くと、焼けてはいなかったが壁にひびが入り、床は足の踏み場もない。自転車や学生の安否確認に走った。なじみのお好み焼き店や美容院、木造家屋は皆、つぶれていた。

復旧のため被災地と自宅を往復する日々。被災地を離れると焦げ臭さが消え、震災前と同じ日常の風景が広がる。自分は家に帰れば温かいベッドがあり、風呂にも入ることができた。温度差に心が苦しくなった。畑さんは、被災者と、災害を体験していない人の間には、「災害の深い河」と表現する隔りがあることに気付く。自分はどちら側か。いついた水に漬かり、行き来しているような思い

命との向き合い方を問う



ナイチンゲールの肖像が掲げられた研究室で阪神淡路大震災を振り返る畑吉節未さん＝14日、岐阜市東鶯、岐阜保健大大学院



を抱いた。

「どうやってつなげたらいいんだろう」。そう考えて神戸大の大学院へ。阪神大震災や中越地震など災害の第一線にいた看護師40人を週末ごとに訪ね、話を聴いた。トリアージで助かる患者が優先される中、「まだ温かいやないの。何とかしてよ」と医師の服をつかみ懇願する家族の声など壮絶な記憶を追体験する。

震災当日に出産し、同時に上の娘を亡くした母親がいた病棟の看護師は、亡きがらと赤ちゃんを共に一晩添い寝させる場を用意した。泣き通しながら「これで別れができました」と朝にお礼を言われたという。「災害看護は看護者の本

倒壊の恐れのある建物から取り出された点滴の管で患者の痰を口で吸った新人がいた。停電が回復したわずかな時間に電気ポットで医療器具を消毒したり、取り出せないカルテ代わりのメモを壁に貼ったり。皆、自分自身の感性や想像力、行動力で乗り越えていた。

毎年、追悼行事がある神戸市役所南の東遊園地。畑さんは講義が始まる頃や講演をする前、必ずそこにある犠牲者名簿の銘板に触れ、「一・一七 希望の灯り」の前にたたずむ。

奪われたすべてのいのちと生き残ったわたしたちの思いをむすびつなぐ

刻まれた文字を読み返し、思いを新たにします。

長田区に開学した私大で13年間教え、昨春から研究の場を岐阜保健大大学院(岐阜市東鶯)に移した。教授として災害看護の理論化と、避難所に来られない在宅患者のケアの確立に取り組む。「濃尾地震の経験を引き継いでいますか? 危機感を持っていますか?」。27年の節目にそう問い掛けた。

企画「災に備えて」は不定期掲載。災害で命を失わないために、今できることを考えます。